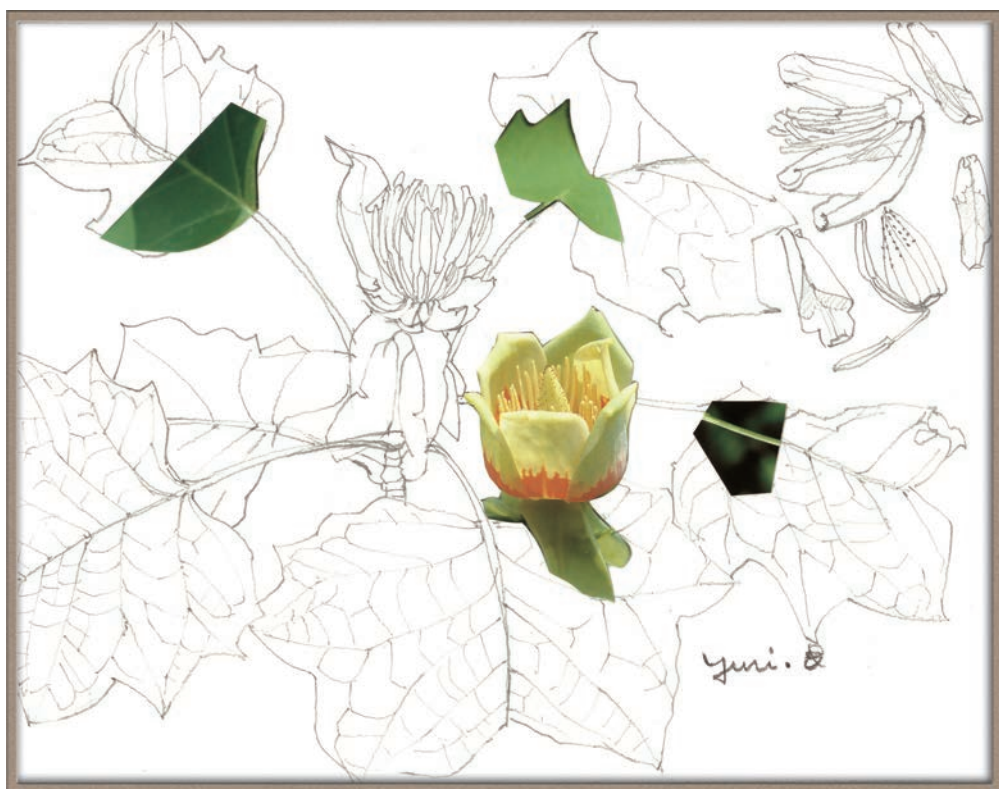


三河アララギ

平成二十八年

五月号

第六十三卷 第五号



ニューヨーク日記(115) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Faena Hotel Miami Beach March 18, 2016

Blue Shoe Diaries



マイアミにFaenaと言うアルゼンチンのホテルが出来ました!そこに何故か大きな黄金のマンモス(本物らしい)が立派に飾られています。こうゆうアートってどうやって出来るのかね?マンモスの骨なんて簡単に買える物でも無いし。って不思議に思いながらホテル内のアルゼンチンレストランLos Fuegosでチミチューリを付けた大きなステーキを食べてきました!美味しかったけどお値段が。。。おそらく有名シェフだからかな?

The Argentinean hotel, Faena opened in Miami! And as their pièce de résistance, they have installed an impressive golden mammoth display. The piece is called "Gone but not Forgotten" (2014) by Damien Hirst. So how does an artist go about obtaining a mammoth to make art? It's not like you can go buy the bones somewhere. Pondering such things, I went to the restaurant in the hotel called Los Fuegos to have a massive rib eye steak with some chimichurri. Great Argentinian flavors! But with an even greater price tag. Maybe because of the big name chef!

目次

第六十三卷第五号(通卷七四九号)

表紙・ユリノキ

今泉 由利(1)

ニューヨーク日記(115)

Blue Shoe(2)

ノボタンの窓

御津 磯夫(4)

歌集「はゝきくさ」

大須賀寿恵(5)

歌集「草々」

今泉 米子(6)

海越えて

岡本八千代(7)

琥珀

今泉 由利(8)

お内裏様

弓谷 久子(9)

山並み

青木 玉枝(10)

入学祝い

内藤 志げ(11)

ふる里雑歌

林 伊佐子(12)

杏の花

安藤 和代(13)

ギフチョウ

鈴木 孝雄(14)

異常なし

清澤 範子(15)

雑祭

足立 晴代(16)

ポールウォーキング

阿部 淑子(17)

もどる

伊藤 忠男(18)

愛犬

森岡 陽子(19)

音羽川

白井 信昭(20)

弥生とて

近藤 映子(21)

母の法要

杉浦恵美子(22)

尖り芽

山口千恵子(23)

歌集「夢のつづき」

夏目 勝弘(24)

歌集「夢のつづき」

水上 信子(25)

『ことよせ』

いーはとぶ(26)

吉見 幸子(26)

牧原 正枝(26)

岩瀬 信子(26)

石田 文子(26)

森 厚子(26)

山崎 俊子(27)

三田美奈子(27)

水野 絹子(27)

牧原 規恵(27)

稲吉 友江(27)

鈴木美耶子(27)

現代学生百人一首 秀逸作品

東洋大学(28)

『俳句』

大迫 京子(32)

森岡 陽子(32)

松本 周二(32)

田中 清秀(33)

重野 善恵(33)

小柳千美子(33)

今泉 由利(34)

米田 文彦(34)

柳田 皓一(34)

山元 正規(35)

かさね吟行会

植村 公女(35)

『酔いの徒然』(49)

田中 清秀(36)

本からのあれこれ(6)

丸山酔宵子(38)

ある自然科学者の手記(48)

米田 文彦(40)

絹の話(66)

大橋 望彦(42)

短歌に詠まれた茂吉

今泉 雅勝(44)

五十六回

楽しい時間(42)

鮫島 満(46)

「楽しくマナー」(11)

山本紀久雄(48)

童謡「きつねのよめいり」

辻 照子(50)

『歴代天皇御製歌』(五十五)

高橋 育郎(52)

『氷魚』のことから(184)

貫名海屋資料館(53)

「佐渡が島」を地図で辿る(1)

(五十六) (54)

「水魚」のことから(184)

岡本八千代(55)

「佐渡が島」を地図で辿る(1)

夏目 勝弘(56)

ことのはスケッチ(49)

今泉 由利(57)

編集室だより(二〇一六年 三月)

三河アララギ(58)

和菓子街道(115)

平松 温子(59)

お知らせ「三河アララギ」について

(60)

ノボタンの窓（昭和二十九年〜昭和四十年） 御津磯夫

干されたる海苔のあはひをめぐりつつ往診に来て患者を探す

弔辞もちてわがむかひゆく豊津の山ふもとに低き虹のきれはし

休診日の何とはなしに暮れはてて欠伸をしたり孫とわれとが

久我山に屋根赤き小さき家あれば孫はかへりゆく我儘になりて

還暦の日の朝より眼鏡ひとつ置き忘れしを探しなどして

父の息つひに絶えにし去年の日のこのあかときははや寒かりき

わが部屋に夕餉よろこびたまひつるみ齡はけふのわれにおなじき

ストーブをつけたる夜のわが窓にゆれつつ白しダチュラの花は

道の上に拾ひし苗木何ならむ植えてそそげば萌えいづるべし

ビルマ仏恋ひくるのみにあらなくに幾年ここにをだまきの花

歌集「はゞきくさ」II

大須賀寿恵

傍にいますのみにて心和む市川先生が吾が副長となる

栄転を祝ふ便りを書き終はる一と月も延び延びとなりぬし今宵

連休には体いたはらむ薬飲みて又床に入るスモン病の吾は

表装のできたる阿礼の埼の拓本が今朝の出がけに届けられ来ぬ

原紙切りつつ眠りたるらし事務室の電燈を皆つけしままなり

夾竹桃の花をくぐりて市教委の補助監査にわれは来にけり

カンボジャの出土の古銭吾の掌におきて酔ひたる君立ちあがる

刈安の穂に立つ音羽の川べりを歩みつつをり悲しみ持ちて

君の便り遠くなりしを思ひつつ真夏の歩道の石をけりゆく

実習を終えし調理員等と校庭の白樺の下の風に吹かるる

歌集 「草々」

今泉米子

病みあがりの夫と歩みて畦をゆくほのかに白しおもだかの花

宵はやく窓を閉ざして眠るなり月下美人の笑まむ今夜も

最上川の河口の胡桃わが庭に果を結ばず大木となりぬ

屋根伝ふコンクリートの白きみち祖おやの城趾にいたるといふか

わが祖の伝記書きまししところとぞ全福寺趾の礎に居る

裏庭の草うら枯れて朝々の白き座布団の上のくさの実

シヨーキランの球根ほぐして畝づくる逆さにおきたるものもありつつ

わがいのちありて今日逢ふ菘翁の楷書厳しき雪冤碑の文字

鞘堂の中の石文に風化見ゆ貫名苞の署名のあたり

菘翁におもかげ似ると伝へつつ幼子は育つブエノスアイレスに

海越えて

蒲郡 岡本八千代

蒲郡の海越えてまた海越えて小田原に働くわが孫セイジ

セイジより一通の手紙届きたり「自らが求め自ら働く」

何故に涙出づるか一通のおまへの手紙のことばことばよ

住まひするお前の小田原海の色けふの蒲郡と同じ色かも

男子をのこなら男子らしきに生きて欲し淡々としてまた恬淡てんたんとしてね

西浦の空も春空ねむたげののたりのたりの海のごとくに

東の暁ひんがしの茜わが部屋の障子に低く染めつつありて

ひとりなば白湯を静かにすすりをりいつかもこのことありし思ひつつ

微熱つづくわが老ゆらくを思ひつつ今宵も両手に湯のみ包みて

漱石と子規の親交にありたるらしユーモアとふざけの本読みて愉し

琥珀

東京 今泉 由利

南洋杉の樹脂に囚とらわれ固まりぬ琥珀の中の一匹羽虫

太古へと思ひ誘ふ飴色の石と化したる琥珀をひとつ

あまりにも長き年月戻りゆきやふやく至る羽虫生ひ立ち

富士山の見えざる景色ゆきゆきぬ花曇りとふ今日の薄雲

幾度も見あげし木末こぬれ今日は逢ふほんのり紅のふつくら薔

ひと節にひと節毎に五弁花の梅の花咲くバラ科サクラ属

花芯にはすでに小さき実をつけてすこやかにあれ青梅とあれ

花びらに花びらほどの質量のほんのり見ゆる散る散る花びら

染井にて生れしあ染井吉野にて花びらは散るひたすら只管に散る

エドヒガン・オオシマザクラのクローンにて染井吉野の花びらに埋む

お内裏様

豊川 弓谷 久子

みさとと共に早二十年色褪せぬ五段飾りの片へに佇ちぬ

あでやかなお内裏様に見惚れをり光源氏が心をよぎる

別れ行く夢見て夢の中で泣く別離の季節と覺めて思ひぬ

大木の枝はらわれて明るみし春の彼岸の祖の墓所

鉢陰よりのぞきて素早く身をかくす蜥蜴一匹も我が家の子

花ニラもシヤガも咲き出す我が小庭紫一輪つる桔梗の花

縁起物と子の編む達磨それぞれの表情見せて並びをり

認知症十年病みし姉なりき夢の中では矍鑠とをり

御津山の麓に暮らし四十年年毎ここより見上ぐる桜

ひと月がひと日が早く過ぎゆきぬ桜の花も早ばやと咲く

山並み

新城 青木玉枝

莊の庭紅梅ひらき山並みのかすみのかかる春はまじかに
音のなき眞夜めざめて星空をながめてしばし故里恋し

今更に悔みてくく季すぐる伊丹の生活たつきの幸福しやわせの日び

この頃は自分で選えらんだ道なのに後悔ばかり反省しきり

残り世を身体だけはと案じつつ起きて先づやる体操の朝

デイに来て集りの中話声何処の施設も年寄は大声

馴れぬ土地へ二年を迎へしのび寄る侘しさだけは消ゆる事なし

小鳥となり飛んでゆきたし故里の砂浜往きつ戻りつしたい

年老へば夢も希望も消えてゆく足腰さする朝な夕なに

山里に住みて都会の足音をベッドに浮べ静かな眠りに

入学祝い

豊川 内藤 志げ

蠅叩き持ち行く間にも動きなし大きすずめ蜂をやすやす叩く

いづれかは女王蜂になるべきか弥生初めの大すずめ蜂

鉢を除く土に潜むは瑠璃色のいと美しき細き蜥蜴が

鉢の下に眠れる蜥蜴を起したりもそり動きぬ啓蟄の日に

朝の窓横ぎる鶉の静かなり庭の金柑一粒も見えず

鬼と鬼戦ふごとく竹の揺れ臥して眺むる荒ぶる西風

自転車に通学四十分の三年間体育苦手の穂乃香に拍手

顔を見るそれ犬でよし氏神の祭り日なれば靴履きて来よ

里芋の囲ひのシートに腰おろし速き雲間の如月の空

二人にて買物するも久しぶり穂乃香に印鑑入学祝い

ふる里雑歌

岡崎 林伊佐子

町に出でて歩み久しきふる里の亡びし村の過ぎし日おもふ

住む人の数より多き野猿^{やえん}たち守りし村を友の捨てゆく

夫と来し彼岸の墓に遠き世の仏像はなく盗まれており

一円玉を供えて行きたる盗人は何処に仏像を売りたるらしき

農の汗染^しみ古りたりし作業着を焼きたる煙が山にただよふ

菜の花の群れ咲く畑の紋白蝶あたたかき今日は飽くなく遊ぶ

菜の花のほろ苦き味を老いふたり漬け物にして和え物にして

四十年ともに畑に働きて思い出多き友の面影

「惚けまいぞ」とその一念をつらぬきて九十二才の生終^{せい}へし友

「さようなら」と手を振り別れし温厚な友の面影脳裏に離れぬ

杏の花

豊川 安藤 和代

風邪に臥す十二日間は長かりし紅梅も早や満開を過ぐ

看護師のやさしき声に目覚むれば点滴は早すみてをりたり

杏の花がとてもきれいと孫は朝枕辺に一枚飾りてくるる

梅干しと海苔佃煮が添えられて孫のつくりた白がゆ旨し

助けいるつもりが吾はいつからか三人の孫に助けられをり

末孫が就職するまではと気も足も強くふんばりキッチンに立つ

何ひとつ家事などしない夫なれど朝の牛乳温めくるる

嫁よ見てあなたの息子はピカピカの教師としての出発の朝

かける言葉あまたあれども喜びにあふるる心涙となれり

誕生日孫のくれたるバラ五本それぞれさみどり伸ばし初めたり

ギフチヨウ

沼津 鈴木孝雄

銀葉を覆うミモザの黄色花房の先まで小花に揺れる

対岸の日本平が霞んでる靄か花粉かそれともPM

雨雲抜け白さを増した美霊山カメラを忘れ一瞬を逃す

ギフチヨウの話題ラジオで流れてる古里の山今ありやなし

オオシマザクラ新芽を芯に半球の白い花盛る香りのブーケ

雨上がり若葉つややか陽を受けて青空仰ぐローマンカモミール

ジャガイモの黒サビ病を防がんと種芋日に干し切ってまた干す

石ガレキ背にして生えたデイル二本厳冬越して花芽覗かす

カモミール切られた葉っぱの陰になるしんこの団子はカラスの仕業か

西浦の日曜市のお目当てはナマコに地蛸と寿太郎ミカン

異常なし

春日井 清澤 範子

前立腺癌の検査に今日は来ぬ肝臓すい臓共に異常なし

公園の枝垂れ柳のその枝の細き先にも春のぬくもり

菜園の胞子の飛びて芽生えたる八ツ手植えれば庭にぎわひぬ

結婚をせずに仕事を選び来し娘希望を捨てず面接に行く

堤防を一人歩む吾が足音にすずめは群れて桜の冬木

ストーブの暖かき部屋にて娘とのよしなし事を話し楽しく

ガラス戸に額をつけて庭のなか椿の赤き膨らみみつむ

八十四歳夫の寝息確かめて吾は寝顔をじっと見つめつ

わが家は学童集まる場所にして今朝は静かに登校したるらし

椿咲き小鳥の声は賑やかにわが家に春は訪れにけり

雛祭

東京 足立 晴代

撫子^{なでしこ}ジャパン涙ぐましき闘いに手に汗握りテレビで応援

期待する応援を受けて闘ひし涙の笑顔美しきかな

ピストンの様に動く手走る足世界に輝く若きアスリート^{たち}達(卓球)

遅咲きの梅色褪せてこの日頃春風待てず散りてゆきたり

老松も雪吊り外し穏やかに春待つ姿うれしげに見ゆ

氷雨降る冷めたき日々に冬衣春告げ鳥は何時の日か

雛祭氷雨流れて寒々と雪洞淡く影落し

垣間^{かいま}見る小さき晴間^{はれま}弥生空蓄ほころぶ何時の日か

靖国^{やすくに}の御社深く桜木の散りにし人を偲びて咲け利り

靖国の花ほころびて宣言を待ちし人々喜びて

ポールウォーキング
横浜 阿部 淑子

全国の天気図すべて晴れマーク澄みし青空心浄まる

ヨチヨチの歩み改善ポールウォーキング二本杖背筋は伸びて誇らしく見ゆ

夕暮の落日迫る下り坂二本の杖に力こもりて

菜園の大根疎うろぬ抜き活け置けば莖はすらつと花咲きそむる

桜花咲き頃いかに模様見か寒のもどりで鶴首花見

もどる

大阪 伊藤忠男

まだ続く見守るだけの介護ほど心疲れて虚しさつのる

米寿まで自転車乗りし母なれば奇跡起こるか気力戻れば

桃の花人形飾り華やかな孫の笑顔に我もつられる

節句雛飾りおめかし孫はしゃぐ口に紅さし得意げな顔

残り雛婚期遅れと言ひ伝えなれど娘は嫁ぎ静岡

豊橋の街並み霞み遠ざかる友との会話思い浮かべて

暦では季節らしさの花咲けど季節外れの花に戸惑う

足取りと心は同じ痛む身の辛さ悲しさまだ続く日々

春告げる鳥に草花揃い踏み乗り遅れまい我も春呼ぶ

人の知恵人の勇氣と人の輪に未来を託す今はそれのみ

愛犬

東京 森岡陽子

愛犬の名前揃ひぬ和菓子成り胡麻と胡桃と杏と木の實

鎌倉の寺にて名前の付く梅は昔を偲びお墓を守る

江の電は触るるばかりに走り行く踏切待つも何処かのんびり

満作は海風受けて長谷観音早春告げる黄色は温い

青春の深夜ラジオの復古版ジェットストリーム飛び付き購買

春うらら多摩川土手の草分けて更に草分け土筆見付ける

金柑の實のなる二本並びたち唄の教室玄関横は

幼名を呼び合いランチ賑やかにテーブル真中モノクロ写真を

犬を抱き日溜りの道ゆく人も乳母車押す人も花吹雪

川浴ひの祭りぼんぼり灯る頃桜も人もほんのり薄紅

音羽川

豊川 白井 信昭

裸木の櫛の細枝からみつつ巻雲早し如月の空

音羽川の清き流れに真鯉たち悠々と泳ぐわが家の近し

永久橋改修了えていつもの歩道渡りてゆきぬ揺れずに行きぬ

堤防下両岸伝いに畑ありき昔を思う今日この日頃

冬草の刈られし土手道一區間踏みしめて行く西風まぜ吹くなかを

大塚の旧道を行くこの角口四季桜ひとつ花開きたり

貰いたる茶色のオーバー箆笥にて昔懐かしく今日は着て行く

昼日中嵐の山の寒ければ榛の木の花見る人はなし

吹き荒ぶさがらの森にまたひとつ太き山桜切られりたり

潮入りの磯浜香る安礼の埼春の訪れ今日の見回り

弥生とて

名古屋 近藤 映子

弥生とてまだまだ外気は真冬なみコート離せず

弥生三月雛祭り幾つになつても娘のお祭り

晴天日時折り春日と思いきや夕には冬の冷えの日々

春雨は正にしとしと見降しの歩道を黒くぬらしぬ

「三月十一日東日本大震災の日」の夫の物言えぬ顔を

思い出す夫の顔は寂しいばかり吾掛け着けた時の顔

三月は曇り日多く冷んやりと朝の空気の喉にしみ入る

早や五年過ぎたる東日本大震災時刻は休み無く過ぐ

春彼岸お中日のお寺参りまだく日差しよ風は冷たし

白黄菊カーネーションに胡蝶蘭彼岸の仏前に生き生きと

母の法要

蒲郡 杉浦恵美子

五年前と同じ曜日は鮮やかに震災津波病床の夫

病む夫を自宅に介護せむとしてエアコン設置も今は空しい

独り居の仏具磨きを我が父は一体幾度したことだろう

今吾が真似事ほどの仏具磨き明日は亡母の法要なれば

法要の準備限無し座布団も茶碗も出さねば赤蠟燭何処

弟に姉あり我に上はない何時まで経てもこの巡り合い

体調の優れぬ叔父が来て呉るる身に沁む心地母の法要

叔父叔母も疾うに超えたる母の歳漫ろに淋し母の法要

法要の最後の客を見送りぬ独居の照明俄かに眩し

やれやれと伸びをしてまた深呼吸法要了えた春やって来た

尖り芽

豊川 山口千恵子

挿木して未だ小さき沈丁花白き蕾の塊一つ

知らぬ間にいつもの所にクロツカス冬の終はりを告ぐる花とか

春の陽を浴びて花咲くクロツカスなまけ心を励ますごとく

草の中に四つ五つの芽の見ゆる去年植ゑおきし芍薬の尖り芽

丈高くなりて貝母の花咲けり珍しき花と人の言ひたり

うつむきて貝母の花の咲きてをり網の目模様を見せることなく

裸木の楓の枝に雨粒の規則正しく並びてをりぬ

一列の小松菜花の咲きてをり季節に正しく黄の色美し

作業の割り当表の廻り来し村人総出の祭り前の行事

彼の人にわれの思ひの届かざり沈丁花の花の香る傍ら

待ちてゐるもの
豊川 夏目勝弘

春の野を今日も朝より歩き行く枯草まとひツクシ伸び初む

電柱の碍子に反射する朝の日の少し強くなりしと感ず

今朝の空の青さが少し柔らぎぬ旅する予定もすることもなし

雑草の競ひ出でくる春がくる草との闘ひが唯一の仕事

やや高くなりて射し込む日だまりにバラの香りの煙りを楽しむ

足裏に気を集中し竹藪を歩きめぐれり竹の子はまだか

寒暖の差に戸惑ふは我のみならず竹の子なるも生きゐる証し

しとしとの春の雨の止みし朝水玉つらなる細細の枝に

この春に待ちゐるものは何ならむこれといふは一つだになし

待ちてゐるものは無しと思へども何かが来たり何かが去りゆく

歌集「夢のつづき」

水上 信子

酔い酔いて帰り着きたるわが家のベランダにみる茄子紺の夜
十五夜を過ぎていびつに照る月の立ち待ち寝待ち齡を数うる

梅の木の葉を一樣にうつむかせ秋を迎うる姿やさしき

姉妹が集いて母の七回忌なべてやさしき子の顔になり

城壁に刻める数多の戦歴をおおいて蔓は紅く色づく

傾きし陽の影赤く長々と水面を渡り船に届けり

言葉なくただ眺めおり落日の一人芝居の時々刻々を

立ち並ぶ白壁運河に水寂びて昔を今の暮らしありけり

山茶花の紅き花びら地にありて降る雪まだらに色を消しゆく

目に迷い箸に迷いつつ酒を飲む小皿豆皿しあわせ時間

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

岐阜市にて華道展参加記念品は美濃和紙書簡箋手触り軟らか
一面に苔むすわが庭に朝の光広ごりてさす苔寺のやう

吉見幸子

脳ドックも検査をしたは結果待つ仕方のない事くり返しゆく
母も子もゲームに夢中座り居て予約診療はゆるりと待てか

牧原正枝

バスを待ち澄みたる冬空ながめつつ今日も一日何事もなきやう
鉢植ゑのバラの小さきつぼみ二つ凍りつきたるごとくに春まつ

岩瀬信子

雨の夜自販機前にお年寄り顔近づけて何か探しをり
豆まきの籤に二等の熊手当り「よい事あるよ」と見知らぬひとに

石田文子

岡崎の矢作の土手に陽のさして河津桜の紅ほつほつ
父は今明日をも知れぬ命にて今こそ妻の手を握りしむ

森厚子

だんだんに声は大きく近づきぬ道行く媼のラジオの音らし

たづね来し人のあるらし墓前には燃え残りたる線香の束

山崎 俊子

巡礼の途中に眺めし桂浜の紺青の海なつかしきかな

いつしかにおぼろとなりぬかの夏に君と歩みし埠頭への道

三田 美奈子

趙雲の如くと応へし若き日の君の眼差し我は忘れず

掛りつけも二代目となる眼科医の庭につらつら寒椿の華

水野 絹子

わが畑の春の仕度をせむと来しにはやくも夕日の光うすれつつ

われに孫が無理しないでねと言ひてくれぬうれしもさびし日だまりの中

牧原 規恵

背後より誰かの気配に振り向けば木蓮の一葉が肩に舞ひ落ちぬ

孫からの手紙はいつも宇宙人それでも嬉し我が宝物

稲吉 友江

今宵ひとり小さきテーブルにわが夕餉雑炊啜る静かなる音

しなの号はトンネルいくつ抜けたかしら木曽福島は白雪の中

鈴木 美耶子

現代学生百人一首

東洋大学

【秀逸作品】

「正義って何だろうね」とつぶやいて歴史の教科書めくってる君

秋田県立秋田西高等学校三年 加藤 菜々

木を削る音が身体にしみついて頑固な祖父は今日も働く

山形県鶴岡中央高等学校三年 鈴木 陽

台風が落ちていった宝物水の鏡が満月映し

東洋大学附属牛久高等学校二年 富澤 菜央

生物部滞在時間自宅越すアズキゾウムシ僕の友達

埼玉県立春日部高等学校二年 石井 滉之

「勉強は？」と聞かれる度に見せつける中指にあるふくらんだ皮フ

芝浦工業大学柏中学校一年 小澤 海地

夏休み最後の一日父と嗅ぐ歴民博の干し鰯^ほの臭い^か

昭和学院秀英中学校一年 佐藤 拓真

今までは「電話なんかで済ませるな」今では「せめて電話で話せ」

千葉商科大学付属高等学校一年 高橋 誠哉

やどかりが夏の日射しを受けながら築浅物件探し求める

学習院女子中等科一年 黒田 智都

赤本に常識であると侮蔑されあせる私にせまる一月

東京都立竹早高等学校三年 松本 英子

心地よい紙の香りに包まれて活字の世界を私は旅する

東京都立片倉高等学校二年 森 静香

二人きり工場の中向かい合いひと夏過ごしたガス溶接と

東京都立府中工業高等学校二年 岡田 大和

御嶽山噴火で気付く当たり前人も地球も生きていること

中央大学高等学校二年 小岩瑞季

江波車庫にひっそりと住む車庫の主ほこりを被った被爆電車

広島学院中学校二年 重信圭祐

機械にも命を吹き込む職がある憧れて今機械科にいる

広島県立広島工業高等学校一年 倉知拓海

手袋を三重にして清拭^{せいしき}へタオル絞ると掌火照る

広島市医師会看護専門学校二年 小川美穂

『俳句』

空と海色を一つに鳥曇

大迫京子

遠ざかる遊覧船や鳥曇

鳥曇改修進む寺の屋根

土手草の中に一本土筆伸ぶ

森岡陽子

鳥曇バスは北へと続く峰

油揚げに乗せる落味嗜きざみ葱

大千潟簀立ての底のうごめきて

松本周二

鳥曇ラフマニノフの「リラの花」

水速し小石のごとき蜷の群

鳥曇あせし瓦の大寺院

田中清秀

初桜高みに見ゆる二三輪

線香の供花に漂ふ彼岸西風

花青木誉められもせず庭の隅

重野善恵

物音に飛び立つ小鳥鳥曇

陽炎のはかなき跡や草の花

菜の花の押し寄せてゐる空家かな

小柳千美子

多摩川に相聞の歌碑鳥曇

充ち充ちて光を纏う雪柳

ささ波の消え入るところ蘆の角

今泉由利

こもれ日は落ち椿にも届きけり

訪ね来よ蓬草餅湯気たつる

鎌倉を一望にして青き踏む

米田文彦

とろとろと過ごせしひと日鳥ぐもり

春昼や寄席に流るる出の囃子

それぞれの花の思ひ出語りけり

柳田皓一

湧水は小川となりて花咲けり

鳥曇何することもなかりけり

暈師の目の隅で追ふ雀の子

山元正規

初花や風まだ荒き目黒川

思ひ出へ吹く蒲公英の絮一つ

一步二歩四歩進んでつくしんぼ

植村公女

赤ちゃんの小さなあくび山笑ふ

先生の眼鏡ごしなる桜餅

春泥や言ひ訳いよよ深まりし

花びら餅ひとつ残りて暮れゆけり

子の無くて小さき雛小さき影

かさね吟行会

「羽根木公園」 三月

田中清秀

羽根木公園は古くは六郎次という野鍛冶が住んでいた
ので六郎次山、その後根津財閥の所有地となったため根
津山とも呼ばれていた。

平成二十八年三月十一日、小田急線梅ヶ丘駅に午前
十一時集合、生憎の曇天で時折小雨の降る正に寒戻りの
寒い一日であった。また、東日本大震災が東北地方沿岸
を襲つたのは五年前のこの日、亡くなられた多くの方々
そして未だ復興道半ばの被災地の人びとの苦労にも思い
を馳せる。

羽根木公園では毎年二月から三月上旬にかけて「せた
がや梅祭り」が地域の人たちによって行われる。梅は百
花の魁と言われるように園内にある約六百五十本の梅が
いち早く咲き揃い春の訪れを伝える。また、梅は厳しい
冬に咲くことから激しい状況でも笑顔絶やさぬ立派

な人のたとえにも使われ古より多くの日本人に愛されて
来ている。

遅れ咲く紅梅しるぎ雨の空

正規

散り敷きて雨香らする梅の苑

千美子

素直に考えると梅ヶ丘駅の名前は梅の名所から来てい
ると思えるが町名の梅ヶ丘は昭和三十九年に名付けら
れ、そして公園の梅林は昭和四十二年に梅の苗を植えた
ことに始まる。梅ヶ丘駅は昭和九年に既にできているの
で、駅名から町名ができさらに梅林ができたという何と
も妙な流れである。因みに元々の梅ヶ丘という駅名がな
ぜ付けられたかは不明らしい。

園内の梅の木には各々名札が付けられて鑑賞の用に供
している。白加賀、月世界、白玉、紅千鳥、鴛鴦、見驚、
楊貴妃、花香実などいかに優雅であじわいのある名前
が多い。特に思いのままは紅白の花が一枝に咲く珍しい
品種でことのほか趣がある。また、早咲きや遅咲き、深
い葉の古木と細身の若木など多くの品種が植えられてお

り鑑梅者の心を惹きつける。

ひと節にひと節ごとの梅の花

由利

老幹に一輪残る梅の花

清秀

生前から世田谷の名誉区民であった中村汀女の俳句の立派な石碑が紅梅と並んでおかれていた。刻まれている句は「外にも出よふるるばかりに春の月」。夫の転勤で世田谷に移り住んだ汀女は庭に紅梅を植えこの花をこよなく愛し多くの作品を残した。紅白梅や軒紅梅と名のついた句集も出版されている。

梅祭りの期間には投句箱が置かれ多くの一般市民が作句に興じることその時の作品も掲示されていた。更に園内の散策は続くが昼近くになっても気温は上がらず益々手がかじかむ。三月になったと言うのにすこぶる寒い。取りあえず近くの喫茶店で昼食を取ることとなりしばしの暖をとる。

冴返る指先触るる梅の幹

しのぶ

老木のほとんど散りし梅の花
近づきて見れば紅梅薬ばかり

皓一
陽子

句会場は近くのマンションの一階にある羽根木区民集会所、住所を頼りに探し当てる。部屋にしっかりと暖房が装備されていたのが嬉しい。囑目三句いつもどおりに選句、講評と行われ料峭の吟行会は無事お開きとなった。羽根木公園はこれから桜も綺麗に咲くらしい。

■かさね吟行会■

日時 五月十三日（金）

場所 関口芭蕉庵

集合

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（四九）

丸山 酔宵子

『夜神樂とかつぽ酒』

雲に聳（そび）ゆる高千穂の

高嶺おろしに草も木も

なびきふしけん大御世を

仰ぐ今日こそたのしけれ

この歌は明治二十一年から二月一日建国記念日に歌われる「紀元節」の国民唱歌。今年には神武天皇即位以来皇紀二六七六年である。

博多駅前バスターミナルからリクライニングトレ付き豪華高速バスで九州縦貫道を熊本を経由し、九州を横断して一路九州のへそへ。久々の冬晴れの中、平日午前中のバスは乗客はたった3人で貸し切り状態。宮崎延岡に向かう国道218号線をひたすら走って、険しい残雪

の山々の峰が続き、「あれが高千穂峡か、あっちへ行く」と天岩戸か：：、オー、あれが神樂の高千穂神社：：」それらしい靈気があちこちに漲ってきている。整備された道路サイドは、素晴らしく刈り込まれ手入れの行き届いたツツジが壁一面に広がり、高千穂中心地まで続いている。初夏のツツジの季節は如何に素晴らしいか：：。ホテルにチェックインして、いざ、町中心部から高千穂神社、高千穂峡まで続くかなだらかな下りの『神殿通り』を、冬日向に一人ぶらぶら：：。高千穂峡は古代阿蘇火山の爆発の火砕流が五ヶ瀬川に添って帯状に流れ出し、となった溪谷。深い木立に囲まれた細い自然道を小鳥の囀りを聞きながら、ゆっくり下って行く。だんだんと谷川の音が迫ってきて、突如、雪の残る柱状節理の懸崖が眼前に迫り、将に雪舟、鉄舟の墨絵の世界である。「高千穂では矢張りかつぽ酒を飲んでくださいよ：：」高千穂町の中心であるバスターミナルの横の雰囲雰気のある赤ちょうちんに誘われ入った、居酒屋『てんつく

てん』の還暦を過ぎたスキンヘッドの日焼けした、いかにも精力絶倫風の大将である。青竹の筒に日本酒を入れ、囲炉裏で燗（かん）をつけたもので、青竹の油分が酒にしみ出て独特の風味になる。酒を注ぐときにかぼかぼと音がするのである。ややぬる燗気味で、トロツとした舌触りと喉越しは、名物馬刺しにピッタリである。

「明日何時に帰るんですか。もし時間があれば、スーパーカート列車に乗りませんか。絶景ですよ・・・。」この大将は地元活性化の活動もしていて、東洋一の橋を通る高千穂あまてらす鉄道のPRもしているのである。

平成17年台風の影響で廃線になった旧高千穂鉄道の線路を使って、天岩戸駅までを走るのである。軽自動車を改造したおもちゃの様なオリジナル・スーパーカート列車、勿論屋根もないオープン列車で、高千穂の心地よい風を受けながらの雄大な景色を楽しむことができる。山間を抜け、トンネルを通り、東洋一の鉄橋からは、眼下に谷川が朝日に輝いている。まだ肌寒さは感じるが、高千穂

の山々には淑気が満ちていて、我が祖先のエネルギーを感じ、将に英気満々。

篝火に浮かぶ神楽やかつぼ酒

酔宵子

本からのあれこれ(6) 米田文彦

「あいの風」

北陸新幹線が開通して一年、東京から富山までが「はくたか」で三時間、「かがやき」ならば二時間で行けるようになった。

私の両親は富山から東京へ出てきた人間であり、私が小学生のとき本家の法事に連れられて行ったことがある。信越線・北陸線を堅い木の椅子に座って行くのだが、何時間かかっていたものか。

夕方東京を出発して朝方のまだ暗い時間に、「直江津―直江津―」という低いくぐもった駅のアナウンスを聞く。停車時間が長いのでホームに降り、いくつも蛇口の並んだ長い洗面台で顔を洗ったものだった。

その線路は新幹線開通とともに第三セクターによる平行在来線となり、富山県内は「あいの風とやま鉄道」となっ

た。一般公募により決定されたこの社名に冠された「あいの風」というのは、ウイキペディアによると、「富山県内など日本海沿岸で春から夏にかけて沖から吹く北東の風を表すもので、古くから豊作や豊漁を運ぶ風として県民に親しまれている」とある。

「あいの風」は俳句の季語でもあるのだが、山本健吉は著書「ことばの歳時記」に、万葉集の大伴家持が越中に赴任したときの歌の中に「あゆのかぜ」として詠んでいる歌があること、平安時代の催馬楽のこと、佐渡の民謡に「あいの風」「やませ」「くだり」という風の名が出ること、能登では新嘗感謝の祭りを「あえ」として饗応の饗の字を当て、同じく沖から珍宝をもたらす風として「あゆの風」を言っていること、などを説いて詳しい。

いろいろ調べてみると、結局次のような風であることが富山の土地の方々の本から分かった。

「あい(あゆ)の風」とは本来春から夏にかけての中程度の風を意味していて、言葉としては北海道から日本海沿岸を通り、瀬戸内の広島・兵庫までが使用領域とされ、

上方に上るときはこれを順風として利用し、北海道・松前に下るときに利用したのは南寄りの「クダリ」風という。

富山から日本海を帆船に乗って商売した人々、船方にとつて、北海道から鯨などの産品を載せて帰るときは「あいの風」に乗り、富山の米などを載せて行くときはクダリ風に乗ったらよいということになる。

そして「あいの風」は東とか北とか一定方向からの風を指すのではなく、北海道から福井あたりまでは北、北東からの風をいい（北国では北西風を指す場合もある）、山陰海岸では東寄りの風をいうのは風が日本列島に当たり山々に沿って吹くことになるからだとされる。富山では要するに沖から吹いてくる風があいの風なのである。

富山の海沿いの地に生まれ育った父は、この「あいの風」という言葉、どうして北からの風が「あい」というのかという疑問を子供の頃から抱いていたという。

そして八十九才で亡くなるのだが、疑問をそれなりに解決できたのは晩年に見たある民放テレビがきっかけ

だった。

それは人気ある民謡の追跡番組で、「津軽あいや節」についてだった。この曲は九州天草あたりで発祥し、日本海の港々を北上して北海道にまで普及していった。佐渡おけさもその変形だそうだが、あいや節は知っていても「あいや」の意味は誰も分からない。番組の追跡は北海道に至り、「アイ」はアイヌ語であつたという発見で終わる。

「そうか、あいの風のあいはアイヌ語だったか！」というのが父の発見だった。

その後、北海道在住の大学教授でもある友人に教える請うたところ、「あい」はアイヌ語の「北」であり「あいの風」は「北の風」である、「アイヌ」は「北の奴」である、ことなどを教えられて長年の疑問も氷解したということだった。

以上、あまり言葉のことなど話したことのない父が残していったことについて書いてみた。

ある自然科学者の手記 (48) 大橋望彦

『生・若・老・死』

二年か三年生の理科の時間に近田廣先生がチヨコッと「物の性質は分子というので決まる」という話をされた。その分子という言葉が何となく引つかかつて、理科室の先生を訪ねて「分子って何ですか？」と質問した。先生はニコニコして「少し難しい話をしてみましたかな。」と言われながら、一冊の本を取り出してこれ「君がそんなに興味を持ったのだらば、この本を貸してあげるから読んでみたら良いかもしれないな。」とその本が渡された。確かその本の表紙は「分子のはなし」だったと思う。全ての漢字には振り仮名が振つてあり、読むには読める本ではあったが、内容は全くチンプンカンプンであった。早速先生に本を返しに上がったらば、またニコニコされながら「やっぱり無理だったかな。でももう少しおおきくなればキット判るようになるよ。」と、慰めてくださった。その分子が小生の専門になるとは、そのときは夢にも思わなかつたことである。

四年生の夏休みであったと記憶しているが、父が一冊の本を買つてきてくれた。林操著「365日何故なぜならば」

という題名の本だと思う。一日二頁の365頁で、一日に自然科学の色々な事象から一項目を取り上げて判り易く解説した構成になっていた。夢中になってアットいる間に読んでしまい、その年の夏休みの宿題の自由研究は、「雲の形」という報告にまとめたように記憶する。この辺りから自然科学に異常なほどの関心をもつたのではなからうか。

五年生の時(昭和十六年)の十二月八日、第二次世界大戦(大東亜戦争)が始まった。「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。本八日未明、我が帝國海軍は、西太平洋上において、米國と戦闘状態に入れり。本八日未明、我が帝國海軍は、西太平洋上において、米國と戦闘状態に入れり。」と朝の空気を破つて、ラヂオが報じていた。最初はあまりピンと来なかつた。父が「ついにやつたか……。」と溜息に近い声でつぶやいた。其の内に次第とただならぬことが始まつたようだと感じてきた。それでも戦闘状態つて、どんなことが未だ翌受け容れなかつた。「戦争が始まつたのだよ。」と父が言い含めるように言つたが、顔は何時になく厳しいのが判り、「これは大変なこととなつたのだ」と、段々体が硬直していった。

それから間もないある日、母が子供達を集め「あなたたちは、パパやママのことを、パパ、ママと呼んでいましたが、これ

からは、お父様、おかあ様と言うようにしましょう。」と話した。今までのパパ、ママのほうがなんとなく親しみがあ
り、お父様、おかあ様とは、気恥ずかしいし、他人行儀（当
時、そんな言葉は知らないまでも）な感じは子供心に思え、
いささか抵抗を感じた。しかし、母の顔は真剣だったので、
素直に「ハイ、おかあ様！」とやった。それから時々、「バ、
お父様、や、マ、おかあ様」となったが次第に慣れていった。
しかし、これも中学生となった頃には、友達の前で「お父様、
おかあ様」ではこつ辱ばなしくて言えず、「親父さん、お袋さん」
と言うようになっていった。

「最初の東京空襲」

昭和十七年四月十八日土曜日の放課後に、校庭で友達と
一緒に三角ベース（またはごろベースともいつていた）という野
球の簡略タイプのゲームをしていた。そのとき一瞬だったが空
をよぎった影のような機影が目に入った。当時は模型飛行
機を作ったり、ソリッドモデルといって木を削って、細部に亘っ
て本物そっくりに作り、彩色して机などに飾って得意顔をし
ていた。それだけに陸軍、海軍の航空機は大抵その型を覚
えていたし、新しい型が発表されれば直ぐにもソリッドモデ

ルを作つてあじゃあないか、こうじゃあないかと友達同士で
話合っていた。それが、突然目の前を掠かすめた機影は、今ま
で見たこともない双発双尾翼で、あれは何だろう、と思つた
直後である。遠くの方で、ズシン、ズシンとまるで体操マッ
トを丸太で叩いているような音が聞こえた。誰と言うこと
なくゲームを止めて、屋上に駆け上がった。その時である。
空襲警報のサイレンが彼方此方から聞えてきた。正面に、
市ヶ谷の大本営があるが、丁度、その周りから大きな撃げき基き
気球ききゅう、防空気球ともいつていたが、幾つものゆつくりと揚がって
いった。急いで階段を駆け下りると、職員室から先生方が
飛び出してこられ、「早く地下の小使い室に行きなさい」と、
避難誘導をしておられた。ラヂオで「東部軍管区情報」と
いうのを放送していたが、余りはつきりとしなくて、ただ被
害は軽微であることばかり強調していた。この空襲は、たつ
た二機で襲来したドゥーリットルの操縦する爆撃機であった。
航空母艦から発進して（爆撃機が滑走路の短い航空母艦か
ら発進する試みの最初の挑戦だった）、東京に爆弾を落として
から元の母艦には滑走路が短くて着艦出来ないので、中
国に飛び去つたものだったが、帝都防衛の何と甘いことなの
かと悔しがつたものだった。

絹の話 (66)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

シルクロードで何が運ばれたか

【シルクロードとは】

中国大陸を東西に結ぶ道を「シルクロード」名付けたのはドイツの地質学者のリヒトホーフエンです。

シルクロードといえば、誰しもほのかなロマンを感じる言葉ですが、実は中国大陸中央部の過酷な自然の脅威にさらされ、激しい民族の興亡が繰り返された地域です。

紀元前6世紀以前から黒海沿岸に馬と鉄を使うスキタイ文化が生まれ、紀元前4世紀アレキサンダー大王の東征で中央アジアとギリシャの交流が始まり、その後、東方では匈奴が勢力をのびし、圧迫された種族の民族大移動が起り、西に逃れた月氏が遂にスキタイの文化に接触する事になるのです。そうしてスキタイを経由したギリシャの文化が匈奴を通して東に伝わった道が、北緯50度線を東西に貫く北回廊で、馬で往来するステップロードと言われるシルクロードの1本のルートなのです。

もう一つの道は敦煌から桜蘭を通じてタクラマカン砂漠の南のホータンをぬけ、オアシス伝いに行く南回廊の

オアシスロードです。三蔵法師など多くの人々はこの道を往来したようです。ところが通過するパルティアの国々（現在のイラン地方）のひどい中継搾取激から逃れようと、中国の広東からインド洋、アラビア海を通過してローマに至るルートや、ローマからパルティアを回避して、インダス川の河口からオアシスロードに入って西安（長安）に至る南海の道も開けていったようです。

漢の武帝は新たな雲南ルートの開発を試みましたがヒマラヤ山脈に遮られて断念しています。雲南やカシユガル（北西インド）との交流が生まれました。

シルクロードが正式に交易のルートとして整備され始めるのは漢が匈奴の脅威を削ぐため匈奴に迫害され西に追いやられて大月氏国となった月氏と組んで匈奴を征伐する為、その交渉に張騫を派遣した事に始ります。西に逃れて匈奴の脅威が無くなった月氏は今さら匈奴と戦う必要はないと、漢の申し出を断るのですが、帰国した張騫の西方見聞録が、漢王朝にシルクロードを経済の道として認識させたのです。

【シルクロードでは主に何が運ばれたか】

シルクロードは一朝にしてできた物ではありません。

先史時代より豊かな新天地を求めたり、他民族の迫害を逃れる為、食糧を持ちながらオアシスを一つずつ東に伝わって、北東中国の粟主食文化（採取文化）に小麦文化（農耕文化）を伝えたのはオアシスルートと言われています。その結果石包丁から鎌の使用が始まり、胡瓜、胡麻等々野菜、果物の種子がもたらされ、さらに従来豚、犬から羊、ヤギが加わり大変革が起こって来るのです。

戦乱興亡めまぐるしい紀元前数世紀より中国の絹は外交交渉には欠かせない戦略物資でありましたが、それを手に入れたローマの貴族達にはどんなに高価でも買おうと云う垂涎の品になりました。東から西に運ばれる品の8割は絹（前漢の時代には錦、羅、紗、綺等、染め物でも纈纈、蟬纈などの高級品も多数有り）であったと言われています。その次はセレス（絹の語源…当時のローマでは中国のこと）の鉄（恐らく鑄鉄：炭素の多い鉄：高熱でたたいて焼きを入れなくてもよく切れる鉄、武器の量産可能）、セレスの皮（よくぬめされ、染織された皮革類、虎、豹、テンの皮）等が主な物でした。

西から東に運ばれる物はステップロードでは櫛目文土器や金（スキタイ、トラキアの金細工は特に有名）、銅（中国の殷の時代に青銅器文化が隆盛し、柄の付いた

鏡、戈、矛、鉞等の武器から剣が主流になる）等が主ですが、朝鮮半島を経由して日本にも届いています。オアシスロードでは彩文土器や銀（銀貨や銀細工）、鉄、ソーダガラス、汗血馬（大宛国産の馬）またインドのカシミールの様な脇道からも毛織物、刺繍製品、山珊瑚、琥珀、碧瑠璃（青いガラス）、牧草、葡萄等が加わっております。文化面でもゾロアスター教、仏教等も南回廊を通して伝わって来ています。

南海ルートからは象牙、犀の角、真珠、亀甲、子安貝、等南海の珍品が運ばれました。

【シルクロードが果たした役割】

今は秘境となってしまうているシルクロードも有史以来二千年あまりに及ぶ東西の交流の主流を担って来ました。物だけでなく人の往来も激しかったと思われまます。当時の絹は中国を出てローマに到った時は100倍もの値段になったと言われております。

おかげで西安（長安）の都は絹がヨーロッパに伝わるまで千数百年繁栄に沸くのです。

そこに集まった文物は日本にも大きな影響を与えています。正倉院などはそのよい例でしょう。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人― 五十六回

「月虹」 鮫島 満

十 五味保義 2

本稿は、本誌平成二十五年七月号「十 五味保義」の続稿である。

トタン板の中の畳を掃きて居り童馬山房の焼跡にし
て

松黒く立ちたる土に落は萌ゆたどきなくして念ふ吾
君きみ 『此岸集』昭和二十一年

第二次世界大戦時の昭和二十年五月二十五日の東京空襲によって青山の茂吉宅、病院が全焼した。茂吉の自宅は童馬山房と呼ばれていた。茂吉はこの時すでに山形県金瓶に疎開していて、敗戦後帰京したのは昭和二十二年十一月であった。

したがって右の歌は、作者がその焼け跡を訪ねた時のものである。トタン板囲いの仮小屋の畳を掃いていたのは茂吉やその家族ではないのである。二首目には「童馬山房跡」という小題がある。焼け跡に、茂吉がたびたび

詠んだ跡の臺が萌え出ているのを見て作者はなすすべもなく茂吉の疎開生活を思うだけだといっているのである。

童馬山房の車庫に人住む物音をこよひ野分の中に立ち
ちきく 同・昭和二十二年

「野分」の語があるので、茂吉はすでに家族の住んでいた世田谷区代田の家に帰っていたかもしれない。あるいは、帰京前かもしれない。そんなころ作者は青山の焼け跡を訪ねたのであろう。

秋草に地下足袋の足をあぐらして原稿にかがみたま
ふ老先生 同・昭和二十五年
代田より梅ヶ丘に向ふ寒き道たどたと行き給ふ草
丘に見れば
老いてなほ匂ふ茂吉の紅君見ずや今しふるひ立つべ
し

昭和二十五年、茂吉の体は相当に衰えていた。散歩の時には疎開席で履き慣れていた地下足袋を愛用した。そして草の上に腰を下ろすのも疎開先での習いだだった。三首目には「加藤信夫君に贈る手紙の歌」と註がある。「匂ふ茂吉の紅」とは頬の赤さに艶があるという意味である。

来て欲しと言ひ給へれば来りたり用事大方忘れゐる
君

ゆたかなる老年は遂に叶はぬと言ひ給ふ声は白髪かみの
なか

来るたび嘆き新しくかへる道けふは逢ふやさしきつら櫛
の若葉に

草丘は春すぎがたの光さし渡されし葉書持ちてわが
ゆく

一首目。呼ばれて行ってみると茂吉は用事を忘れてい
たというのである。四首目によってその用事の一つが葉
書を出すことだったことがわかる。

二首目。茂吉の老年は「ゆたかなる老年」とはほど遠
いものだった。疎開のこと、敗戦に伴い戦争犯罪人視さ
れたこと、重病に罹ったことなどの苦勞に襲われた晩年
であった。だから三首目のように、来るたびに新しい嘆
きを訴えて、櫛の若葉に慰められるほどに作者を悲しく
させたのである。

浅岸に寄る藻の花の白き見つここに寂しく在りけむ
君

ただ暗く川ゆき流れ風吹けばいづべにわれの悲しむ
止まむ

今宿の方に乱るる夜半に雲川にしたがひ行くべくぞ

思ふ

一首目には「大石田」と小題がある。茂吉の死後にそ
の疎開先であった大石田を訪ねたのである。二、三首目
には「大石田再び」と小題がある。親しく仕えていた師
に逝かれた私の悲しみはどこへ流れてゆけば止むのだろ
うかという嘆きを詠んだのが二首目である。三首目に詠
まれて「今宿」は茂吉が好んで遊んだところであ
り、すぐ近くには、「最上川の上空にしてのこれは未
だうつくしき虹の断片」（『白き山』）の歌碑が建って
いる。また、「恋しかるものの如くに今宿のへぐりの岨ゆ
蔵王山が見ゆ」（同）と詠んだところである。作者にとっ
てはその茂吉につながる今宿の方へ流れてゆく夜半の雲
さえもおろそかにできないのである。

直接に迫り来るものの痛くして歌集『つきかげ』を
暫し閉ぢたり 同・昭和二十九年

茂吉晩年の歌集『つきかげ』を読んでいると強く直接
に胸に迫るものがあったたまらず閉じてしまったという
のである。晩年の茂吉を知る人たちに共通する思いであ
るようである。

楽しい時間 42

山本紀久雄

2016年3月31日

フィリピン訪問(1)

長らくワインについて書いてきたが、最後に二つ、最近の話題を述べて、ワインは卒業としたい。

話題は、シャンパンが認知症予防に効果があるという英大学の発表である。

「英国レディング大学の研究者らは、ラットを用いた動物実験の結果として、一週間に1〜3杯のシャンパンを飲むと、認知症や記憶力の低下を予防できると報告した。

シャンパンに含まれているフェノール化合物が、脳の海馬と皮質と呼ばれる部分からの信号を調整し、空間認知機能を向上させるといふ。

実験では、ラットを二つのグループに分類。それぞれシャンパン、シャンパンではないアルコール、ノンアルコール飲料を6週間接種。

すると、シャンパンを摂取したラットの記憶力が、それ以外のグループより優れていたという。

ちなみに使用したシャンパンは、フランスのシャンパーニュ地方で栽培されたシャルドネ、ピノ・ノワール、ピノ・ムニエの3品種をブレンドした伝統的なスタイルのもの。

ロサンゼルスタイムズ紙に対して、同大学のジェレミー・スベンサー教授は、次のようにコメント。

『これまで赤ワインに含まれるフラボノイドに、同じ効果が報告されているが、フラボノイドが含まれていないシャンパンでも、生物学的活性を欠くと考えられていた小さなフェノール化合物が、同じ効果を秘めていることを示した』

また、同研究チームは今後、人間での調査を行う予定だ。辛党にとつて朗報となるか』

この中で述べられた赤ワインの効果は、「The French Paradox」として、既に広く知られているが、そのきっかけは次の報道からだった。

「1999年11月17日のことである。アメリカCBSテレビのニュース番組『60minutes』や『The French Paradox』とのタイトルで特集を放送した。

フランス人はチーズ、クリーム、鴨のような高脂肪食をたくさん食べるのに、心臓病の有病率がアメリカより低い。このパラドックスをどう説明するか？

レポーターのモーレイ・セイファーは、科学的に分析した結果、赤ワインを飲むことと、心臓病有病率の間に関連があると伝えた。

アメリカ中が大騒ぎになる。『そうか、赤ワインか』と赤ワインを健康食品扱った。

CBSの放送直後、アメリカのフランス産赤ワインの輸入量が30パーセント跳ね上がり、フランス・ワインが一躍脚光を浴びたのである』

さて、フィリピンに入りたい。

フィリピンに着いたその日の夕食で何を飲んだのか。それは勿

論「サンミゲルビール」に決まっている。フィリピンを代表するビールであり、フィリピンに在る間、毎日、サンミゲルだけ飲み続けた。他に飲むものがないからである。フィリピンにワインはないし、あるのは地酒の焼酎だけらしく、それならサンミゲルというわけ。

そこでサンミゲル社を訪問してみた。サンミゲル社のビール部門は日本の麒麟麦酒と提携していて、今では有料道路や電力会社、製油所、不動産などへと、経営の多角化を進めている。

写真がサンミゲルの本社であるが、外壁に緑を這わせているところが、他のマニラ市内ビルとは違うところで、何となく環境企業という感じである。

社内に入り案内されたところが、男女4人で資料を広げて会議している何やら役員会議室らしきところ。ここで4人の中で一番恰幅のよい男性が説明してくれた。

聞いているとビールのことは何も言わない。しきりに高速道路建設や石油元売り会社ペトロンの展開計画ばかりである。当然ながらビールの提供はないし、あまり楽しい話でない内容が続く。説明が終つて、何か質問あるかというので「マニラの渋滞はすごい。先ほど説明があった高速道路建設で、少しは渋滞が減少するのにか」と尋ねると、「この計画中の道路ができる」と、空港近辺の渋滞はだいぶ治まると思う」と回答。



この発言でわかったのは、フィリピンでは政府が道路計画をするのでなく、民間企業が行っていることで、これでは国全体の道路網の整備はなかなかはかどらないと感じたが、それがフィリピンの特徴だろうと思いつつ、早く終えて、どこかでサンミゲルビールを飲みたい気持ちが強くなったので、次の質問は差し控えたが、突然、ここでミャンマービールのことを思い出した。

ミャンマーのサイゴンでも、到着した日の夕食でミャンマービール早速飲んでみた。初めて飲む「ミャンマービール」の美味さは予想を超えた。東南アジアのビールは概して軽い。暑い気候に即しているのか軽い飲み口でグイグイ量を飲むようなビールが多い。タイやベトナムなどではビールに氷を入れたりもするが、ミャンマーは違う。瓶ビールをジョッキに注いでテーブルに運んで来てくれる。一口飲んで「コクがあり味がしっかりして、喉ごしも良い」と感じた。サンミゲルより美味い。



- その理由は三つである。
- ①世界経済が低成長下の中、フィリピンが2016年7%程度の高成長見込みと好調
 - ②世界の困窮邦人768人(2010年)のうちフィリピンに332人と最多を占める背景
 - ③フィリピンの未来について予測してみたい

楽しくマナー (II)

辻 照子

「レストランでおしゃれに」

レストランでテーブルに案内されたら、椅子の左側から椅子が膝に軽く当たったら振り向かず、スツと腰を下ろすのが美しい動作です。

テーブルにこぶし分位あけて座り、頬杖、肘を付く、腕組み、脚組み、髪をかき上げたりするのはタブーです。

テーブルについてワインなどドリンクがサービスされ始めたら、ナプキンを膝の上に二つ折りにし、輪を自分側に向けて置く、



ナプキンをテーブル上にいつまでもそのままにしてスタッフに膝の上にと促されるのはちよつと恥ずかしいです。

背筋を伸ばしナプキンを持ち上げ二枚になった下側で口元を軽く抑えるように使い、食事がすんだら軽くたたんでテーブルの左に戻します。

綺麗にたたむと料理が美味しくなかったという合図になります。

ナプキンを使わずハンカチやティッシュペーパーを使うのは「ナプキンが不潔」かしらと心配させ、失礼になります。

中座するときは椅子の背もたれやテーブルにナプキンの先端が出るように垂らしておきます。テーブルの上に置いてしまうと「退席した」と思われすべて下げられてしまうことがあります。

テーブルに位置皿の両側にカトラリーやグラスがセットしてある場合と、食事やドリンクに合わせてスプーン・ナイフ・フォーク、グラス類をその都度セットしてくれる場合があります。

すでにセットしてある時は外側から使います。カトラ

リーレストに、ナイフやフォークを置き、料理ごとに取り替えないカジュアルな場合もあります。

スプーンの飲み方は「手前からですか？奥からですか？」と質問がよくあります。イギリス式は手前から奥へ、フランス式は奥から手前へすくい、スプーンの手前から音を立てず口に流します。

手前／奥どちらからでも良いですが音をたてて飲まないように、左手はテーブルの上に軽くのせ、飲む時はスプーンを上げて口を皿に近づけないように。

食事の開始時は特にマナーに気を遣って周囲に打ち解け、美味しく楽しく会話を進め、和やかに日常では味わえないレストランでおしゃれなひと時を過ごす事が一番です。

レストランで一般的な食事のマナーとして。

○お皿など食器類は手で持ち上げない。(和食の時は茶碗、お椀、小鉢等は手に持つ)

○料理は全員(長いテーブルで大勢で会食の時は周囲4〜5人)に配られたら食べ始める。

○右が上座なので、魚の骨などの残りは皿の左側に寄せ

て、退席時のナプキンは左側(下座)のテーブル上に戻す。
○音をクチャクチャたてて食べたり、スプーンをすすって音をたてるのはタブー。

○周囲に迷惑がかかる様な大きな声で話さない。
○サービスを頼む時は黙って手をあげ視線を合わせスタッフが傍に来てから話す。

何度かこのクラスに参加している若い青年は海外生活が豊富で、パース(オーストラリア)の話が楽しくて、ブリスベンからパースのワイナリー、スワンバレーを訪ねた後、ホテルのレストランのディナーを思い出しました。ほぼ満席なのにシーンとしてスタッフが忙しそうに動いていても物音がせず、周囲の客も楽しげに会話をしているのに格調高い静けさです、どの国でも行き届いているレストランは居心地が良いです。

銀座、築地本願寺、歌舞伎座、浜離宮、東京駅などに歩いて行ける中央区の下町で(1960年前後)生活をしていた頃、思えば父に連れられ食事をした銀座資生堂レストランがちよっと緊張した幼い頃のおしゃれなレストランデビューでした。

童謡 『きつねのよめいり』

高橋育郎 作詩
平野真由 作曲

ひとざとはなれた

もりのかけ

しろぬりはなよめ

すましがお

きつねのよめいり

みえまする

おぼろのつきの

うすあかり

うれしはずかし

つのかくし

ちようちんぽつぽと

みえかくれ

こんなしずかな

よるですと

おかごにゆられて

ゆくわいな

とおいむかしの

おはなしは

きつねのよめいり

みえまする

ちようちんぎようれつ

ゆくわいな

かあさんのぬくもり

あたたかい

「歴代天皇御製歌」(五十五)

貫名海屋資料館

「後伏見天皇」第九十三代・在位・二二九八年(十一歳)・一三〇一年(十四歳)(持明院統・第三代)

後伏見天皇は、伏見天皇の第一皇子。在位は短く、幼少であられた。伏見上皇は、花園天皇、光厳天皇の院政をおこなわれた。

足利尊氏、六波羅攻略のとき、東国へ逃れようとしたが、捕えられ、後出家した。歌集「後伏見院御集」、日記「後伏見院宸記」がある。

伏見院御忌

沈みぬる身は木がくれの石清水さても流れの世にし絶えずば

風雅集

かき暮す袖の涙に堰せきかねて言の葉だにも書きもやられず

新拾遺集

見るままに星の光もきよくなりて雲ぞ晴れゆくあかつきの空

今朝の朝け袂涼しき風立ちていとはや秋のしられぬるかな

新千載集

ひとりあかすよもの思ひはききこめぬただつくづくとふくる夜の雨

風雅 1692

「歴代天皇御製歌」(五十六)

貫名海屋資料館

「後二條天皇」第九十四代・在位・二三〇一年(十七歳)・二三〇八年(二十四歳)「大覚寺統・第三代」

後宇多天皇の第一皇子。天皇在位のまま二十四歳で崩御された。約三百首の和歌を詠まれた。

ちるまでもながめすてじと山ざくらひとき一木の蔭に日数へにけり

愚藻

蜚きりぎりすそことも見えぬ庭の面の暮れゆく草のかけに鳴くなり

新後撰集

恋しさの寝てや忘ると思へどもまた名残そふ夢の面影

玉葉集

ちはやぶる神のすごもに霜さえしその暁あかつきは今も忘れず

新千載集

すごも || 竹で編んだすだれのようなもの。(ランチヨンマット)

「氷魚」のことから (184) 岡本八千代

今日(平成28年3月26日)から北海道新幹線が開業となった。啄木が生きていたらどう歌うだろうか。——私の友だちに白鳥函子さんがいた。函館の人で名古屋の金城教会に下宿していた。私の下宿から近かったので、学校の帰りはいつもいっしょだったことを思う。

彼女は文学少女で、「氷点」を書いた小説家の三浦綾子さんとも交流されていた。また、函子さんのご両親は、あの「白鳥は悲しからずや」を詠った若山牧水を自分の家に泊められてもいた人たちで、函子さん自身も「白雪」という季刊誌を出していた。私にも原稿を依頼されたりしたことを思い出す。

さて、ここより漱石と子規のことを書いてゆきたい。

子規は漱石の書いた「木屑録」の批評文の中で、漱石のことを「天稟之才」、つまり生まれつきの才能のある人と見て、「余は初めて益友を得たり。その喜びを知るべきなり」と心中の喜びを明かしていたのであった。子規は自分を「偏屈」で、頑固であることを自認していたほどなのに、漱石のことを「正直にして学識ある人」と思っていたらしい。かくして子規は、「すきな人、無暗にすぎ」となつて、漱石との親交を重ねていった。

一方、漱石の方でも、明治二十二年六月五日宛の手紙で、ややふざけて「君の親友なる菊井の里 野辺の花」と署名していた

のであった。この「菊井の里 野辺の花」は漱石の戯号。生家が東京の「喜久井町」にあったことに由来しているとか。こうしたふざけたところも子規を親友と認めていたということだ。

この二人が最も親交を結んだのは、明治二十八年八月二十七日以降の寝食を共にした五十日余のことがあって、かもしれない。この年の四月十日、漱石は愛媛県尋常中学校嘱託教員の辞令が発令され、授業を始めていたのであった。そうして、六月下旬に、当初の住居、松山市一番町三番地の城山の山腹にあった骨董商津田保吉方の下宿愛松亭より、松山市二番町八番戸の上野義方の離れ、いわゆるかの愚陀仏庵へ転居したのであった。この時漱石は、自分を愚陀、とか愚陀仏とも号していた。

この愚陀佛庵に病氣療養のために帰郷した子規が居着くことになったのである。誘ったのは漱石の方で、明治二十八年八月二十七日付の子規宛の書簡の中に、

「御不都合なくば、これより直に御出でありたく候。尤も荷物など御取纏め方に時間をとり候はば、後より送るとして、身体だけ御出向、如何に御座候や」

と記しているほどであった。八月二十七日より、帰京する十月十六日まで(宇品に向つて三津を出航したのは十九日)。一階に子規、二階に漱石。間取りは、ともに四畳半と六畳。

かくして、漱石は、子規を迎えて、俳句の勉強をはじめたのであった。(復本一郎著の「余は、交際を好む者なり」岩波書を参考)

「佐渡が島」を地図で辿る(1)

夏 目 勝 弘

長塚節の写生文の名作といわれている「佐渡が島」を、この目で見て、感じてみたかったが、今は行けないので地図上で、その足跡を辿ってみることにした。

参考にしたのは、柳生四郎氏が昭和四十二年四月に現地に行った、紀行文の助けを借りることとする。

「佐渡が島は浜茄子二美人三南瓜四牛の荷鞍五漁村の能六草鞋の項でなっている。

明治二十四年奥羽、佐渡の旅に出る。節二十九歳のとき。八月二十四日の信夫山を散策、そして二十八日松島に泊る。宮戸島泊、石巻街道を東へ牡鹿半島の万石の浦、三十一日鮎川港へ戻宿る。二日海路塩釜へ。

四日仙台を發ち山形街道を西に、作並温泉の岩松旅館へ泊る。五日関山峠を越え出羽の国へ。羽前大沼の浮島、大沼神社に詣で、九日松原峠を越え会津へ。十三日夕刻新潟着。

十四日信濃川の川口より両津の夷港へ泊する。(佐渡は今日で三日共雨である) から始まるが、(波の上)の二項が削つてある。

そして昨日の雨のなかを金北山(1172m)へ登り相川で泊。そして金鉱を見学、真野御陵を拝すも、何も書かず小木の港への描写が続く、大倉谷あたりから外洋となる。

村へ下る道を行き二軒の家で夫婦が網糸を縫っている所で、土地の名を聞く、亭主が皺噎れた声で、西三河という所といった。

弁天岩あたりであろうか、浜茄子の花を採れるだけ採り、雨の湿りを拭い手帖に挟む。

小木の港へ辿り着いたのは黄昏近く、此所では見掛の一番より宿

屋に泊ることにした。

女が表の二階へ案内、ランプが点つく、急に明るくなる。この宿は建築して間がなく清潔で心持ちよい、茶を出してくれ、気がつくくと驚くばかりの美人でまだ二十にはなっていない。佐渡に来てこんな美人に逢うとは思わなかった。

一日雨のなかを来たため、濡れた単衣もズボンも、みすぼらしく此女に対し何んとなく極りが悪く思い、女が出ていったあと直ちに帯を締め直す。

さうして手帖に挟んであった浜茄子の花を一つ一つランプの下に並べた。

此夜は客がなかつたので支度がしてなかつたから此で我慢してくれと、茶碗に小豆飯が堆くつけたのを差し出した。

女を見ると紺飛白の単衣に白地を重ねて居る。紺飛白も幾度か水をくぐつて紺が稍うすはけて居て野暮臭い支度をして居ながら女は端然として座つて居る。やっぱり美人である。

箸を手にしたときに、女は浜茄子の花に気づき、手にとると、どこで採つた花かと聞く西三河の海岸でとつたという。 (美しいものでございます、花というものは、花を見ているとなんにも要らんやうな気が致します) といひながら指の先で花弁を掻き分けながら鼻へあてたりしている。

女は指の先まで色が白い。

「佐渡が島」の写生文の全体の三分の一はこの美人さんのことが書かれている。

特に美人さんとの会話の言葉使いが多く取り入れられている。

(葉も賤しい葉ではございません) と語尾の() がカタカナで書かれている。

なぜひ仮名なので書いたのかと、ふと思った。たぶん女の()の語尾が静かな優しい声で節の心の奥に沁み込んできたのである。

ことのはスケッチ (449) 今泉 由利

『セバステイアンとニノ』

アルゼンチンに辿り着いてしまい、途方にくれている私を、彼女の「娘」と受け入れて下さり、アルゼンチンでのことごと、地球に生きる人間であること…教え導いて下さったのはアルゼンチン国の創始に関わる家系の「セリーナ・アラウス・ペラルタラモス・デ・ピロバーノ」さん。

アルゼンチンのナースの頂点におられ、国の内外にわたる活動、室内装飾家としても頂点の方でした。

大きなミサが行われる時には、セリーナさんが祭壇を作られました。その時は、私も手伝わせて下さるのです。

セリーナさん一族の広大な牧場に住み、犬を追いかけるセバステイアンは、本当に可愛らしかった。セバステイアンを保育していた「マルガリータ」が、私の「赤ちゃん」のために、きて下さることになり、同じ家に住み、セリーナ家式に、私の子供達を育て、見守って下さったのです。

マルガリータは、パラグワイの人でしたから、古いパラグワイの言葉、ワラニ語でも子供達が育てられたことをともうれしかったです。

子供達が、アルゼンチンの小学校を終え、日本へ留学する、その日まで。

子供達の日本留学中、セリーナさんは、アルゼンチンから、日本までの「長い旅」を何度もされて、私の日本を「知る」努力

をして下さるのでした。

私の父母の家。言葉は通わないけれど、やさしい空気に包まれて、皆で「同じ心」になるのです。

セリーナさんの甥、私の子供達の「兄」にあたる、セバステイアンとニノ。日本まで、逢いにきてくれた。以前の来日では、何もかも、御膳立てし、先導したのだったけれど、今回の彼等は、事前に、ゆく先々の宿の予約も、興味への予約も、出来ていた。

日本語で書かれた、メニューや記事など、FBIで写し、写った所を指で「なぞる」と同時に、スペイン語に翻訳されている・

スペイン語を入力して、日本語の音声ボタンを押すと、ケータイが日本語を話す。

それを「まね」して言ったり、見てもらったり、聞いてもらったりして、ほとんど同時に意志を伝えあえる。

世の中、こんなことになっていた。私は、辞書を引き、スペイン語を思い出し・・・メールしたり、連絡したり・・・とても努力が要った。もう努力はしなくても良くなったことを教えてくれた。

京都、奈良、宇治、大阪、日光、熱海、東京の名所旧跡。日本の桜の季節に合せて計画をしたという、東京中の桜の名所を、ことごとく。

桜の蕾から始めて・・・満開に至るまで、花吹雪も。

セリーナさんのこと、アルゼンチンのこと、沢山話し、思い出し、セリーナさんと同じ温度を伝えてくれて。

地球の上の、私の宝を。あらためてまた、私のものに。

編集室だより【二〇一六年三月】

三河アララギ賞 鈴木孝雄様

ジャガイモの予定の畝を耕せりモザイク病を天日殺菌

ご自身の行動を、的確に表現される。楽しみにされる農作業は、人が自然に分け入る辺りを楽しく教えて下さいます。

○新連載「童謡」。作詞者、高橋育郎さん。

童謡祭、全国童謡サミット、日独交歓音楽祭：様々に参加され、賞を受けられ、大活躍をされておられるのです。

○歌集「夢のつづき」。水上信子さん。

長く、大手出版社で仕事をしてられました。国内外への旅が豪快です。お酒を心から上手に飲まれます。ご自身から決して「ぶれない」心地良い方です。

○「メディアアセアン寄席」。川口駅、キヌポラにて、ひなまつり女性講談特集。

はじめての、本当の講談。まず「パシッ」と気合が入り、歴史の中に、忠実に語られてゆく、山岡鉄舟、無血開城。中村屋のあんぱんの由来……。歴史が、今に伝っていることに気付くのです。

○梅ヶ丘、羽根木公園吟行。

梅まつりが、昨日終った、という誰もいない、小雨の梅の園。

おおかたの花は散り、この時期の「梅の木」を見るといこうとはあまり無かつたことだから。律義に、まだ咲いている幾許の花に親しみ、雨に濡れ、メモする指は凍えた。

○93番目以後は、人間が作った元素なのだ。日本の研究室で、線形加速器を用いて、光速の10%にまで加速し、²⁰²Pbを²⁰⁸Pbに衝突させ、1-3番目の元素の合成に成功し、命名権を獲得できた。元素を造れるなんて：おもしろい。

○パソコン教室の幾人かで、「古事記」を読もう」という話になっている。たちまち解読本が何冊も集まった。ありがたい世の中になったものです。

○3億5千万年ほど前のこと、巨大なシダ植物の繁栄などにより、酸素濃度が35%ほどと、高かつた。故に、巨大昆虫が応化していたのだという。恐竜展の片すみにあつた「トンボ」の化石の大きかつたこと。様々な事々がおこり、今になっているのだな！

○ロシア大使館内で、催された琥珀展にゆく。

太古の木や葉やゴミや昆虫や・・・琥珀の中にとじ込められているのに興味がある。木が異なれば樹脂の色も異なり：宮沢賢二さん、琥珀がお好きと、琥珀に関しての記述がいくつも残る。

○三椏の花が咲いているから「紙の博物館」に行つてみる気持ちになつた。

三椏（じんちようげ科）楮（くわ科）：トロアオイの根（アオイ科）。根に含まれる粘液を和紙製造の糊にする。

世界の紙つくりの歴史、紙漉体験、和紙造り、浮世絵手摺り：など様々な体験が出来るよう準備されている。昔から、紙をリサイクルしてきたことに興味。

和菓子街道（115）

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

姫街道(11)

難所の本坂峠を前に、旅人が一夜の休息をした三ヶ日宿。宿場内には今も、所々に古めかしい家が散見される。文化7年（1810）創業の酒屋日野屋では、江戸時代からの大福帳や酒壺などを展示している。

宿内で姫街道と伊奈街道とが交わる四辻には、かつて明治18年（1885）創業の入河屋が店を構えていた。今は浜名湖畔の別の場所に移転している。後日、お店を訪れてみたところ、初代の名を冠した創業以来の代表銘菓「甚作饅頭」が健在で嬉しくなった。

宿場外れの高札場跡を過ぎて集落に別れを告げると、いよいよ本坂峠だ。道はのっけからかなりの急坂ですぐに息が上がるが、本坂峠名物の椿の原生林に入ると、疲れも一気に吹き飛ぶ。2月下旬から3月上旬にかけて、頭上を覆う無数の椿の細枝の先には、真っ赤



な花。足元に落ちた椿の花が、苔むした石畳を緋毛氈に変えてゆく。この光景が見たくて、何度ここに足を運んだことか。来年もまた、訪れたいものだ。

卵と牛乳の風味の効いた白生地には漉し餡、カラメルで茶饅頭風に色づけした茶色生地には粒餡がそれぞれ入っている。

◆入河屋

住所：静岡県浜松市北区三ヶ日町下尾奈83-1

電話：053-525-0902

お知らせ

△六月号の原稿は、四月三十日(土)までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月の原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アララギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

◆アトリエトテレビ企画 「絹と三河の木綿」◆

○豊橋 ほの国百貨店

○8階催事場

○6月8日(木)から

6月14日(火)まで

○講演・実演

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。振替口座〇〇八三〇一六一五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アララギ発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―六―A

TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp

Homepage <http://imazumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美